『万葉集』から見る日本の古典 24

獨協大学特任教授　城崎　陽子

天武・持統朝 ―その1―

先回は壬申の乱が近江朝廷側の敗退で幕を閉じ、飛鳥浄御原宮で天武天皇が即位し、六皇子の盟約が取り交わされたところまでをとりあげた。今回は、いよいよ天武朝が幕をあけ、天武天皇が様々な政治改革を成し遂げていき、その路線をついだ持統朝では、近江の宮の荒廃がうたわれているといった話題を扱う。

飛鳥浄御原宮で即位した天武天皇は大化改新の精神に則り、律令国家への改革を実施し、旧弊の諸制度を改革していった。具体的には、宮廷行事を刷新し、地方の芸能を宮廷に取り入れたり、大来皇女を斎宮として伊勢に派遣し、「占星台」（天文を観察し、吉凶を占うための施設）を立てたりしている。また、律令の選定を命じ、いわゆる「飛鳥浄御原令」を定めたとされる。さらに、帝紀（歴代天皇の系譜）・上古諸事（諸種の伝承や説話）の記録を命じ、歴史書の編纂事業が始められた。

また、「八色の姓」によって、諸豪族を新たな身分秩序に位置付けた。服制や男女の髪形を制定したのも天武天皇の事績である。

こうした様々な事績の中でも文学にかかわる事柄として注目されるのは歴史書の編纂事業であろう。このことを元明天皇の和銅五年（七一二）に成立した『古事記』の序文では以下のように触れている。

是に、天皇の詔ひしく、「朕聞く、諸の齎てる帝紀と本辞と、既に正実に違ひ、多く虚偽を加へたり。今の時に当りて其の失を改めずは、幾ばくの年も経ずして其旨滅びなむと欲。斯れ乃ち、邦家の経緯にして王化の鴻基なり。故惟みれば、帝紀を撰び録し、旧辞を討ね覈め、偽を削り実を定めて、後葉に流へむと欲ふ。」とのりたまひき。時に舎人有り。姓は稗田、名は阿礼、年は是廿八。為人聡く明くして、目を度れば口に誦み、耳に払れれば心に勒す。即ち、阿礼に勅して、帝皇日継と先代旧辞とを誦み習はしめたまひき。

天武天皇は、諸家の伝えている「帝紀」と「旧辞」は真実と違い、偽りを多く加えているという。その偽りを今、この時に改めなければ、本当の事柄が滅びてしまうだろう。また、「帝紀」は国家組織の根本となるものであり、天皇の政治基盤となるものである。よって、「帝紀」と「旧辞」をよく調べ、偽りを削り、真実を定めて後世に伝えたいと考え、稗田阿礼に「帝皇日継」と「先代旧辞」を「誦習」させたのである。

こうした天武天皇の政治路線が大化改新以降、天智天皇が目指したものを引き継いでいたことは言うまでもない。そして、そのいのちを引き継いだのが持統天皇である。ところで、その御代に天智天皇の昔をしのび、かつての都が荒廃しているのを悼む歌が『万葉集』には残されている。

近江の荒れたる都に過る時に、柿本朝臣人麻呂が作る歌

玉だすき　畝傍の山の　橿原の　聖の御代ゆ　生れましし　神のことごと　つがの木の　いや継ぎ継ぎに　天の下　知らしめしを　[或は云ふ、「宮ゆ」]　[或は云ふ、「めしける」]　天にみつ　大和を置きて　あをによし　奈良山を　越え　[或は云ふ、「そらみつ　大和を置き　あをによし　奈良山越えて」]　いかさまに　思ほしめせか　[或は云ふ、「思ほしけめか」]　天離る　鄙にはあれど　石走る　近江の国の　楽浪の　大津の宮に　天の下　知らしめしけむ　天皇の　神の尊の　大宮は　ここと聞けども　大殿は　ここと言へども　春草の　繁く生ひたる　霞立ち　春日の霧れる　[或は云ふ、「霞立ち　春日か霧れる　夏草か　繁くなりぬる」]　ももしきの　大宮所　見れば悲しも　[或は云ふ、「見ればさぶしも」]

（巻一・二九番歌）

反歌

楽浪の　志賀の唐崎　幸くあれど　大宮人の　船待ちかねつ

（巻一・三〇番歌）

楽浪の　志賀の　[一に云ふ、「比良の」]　大さだ　淀むとも　昔の人に　またも逢はめやも　[一に云ふ、「逢はむと思へや」]

（巻一・三一番歌）

高市古人、近江の旧き堵を感傷して作る歌　[或書に云はく、高市連黒人なりといふ]

古の　人に我あれや　楽浪の　古き京を　見れば悲しき

（巻一・三二番歌）

楽浪の　国つ御神の　うらさびて　荒れたる京　見れば悲しも

（巻一・三三番歌）

柿本人麻呂の長歌は橿原で即位した神武天皇から代々の天皇が大和で都を営み、政治をとってきたことをはじめに詠い起している。そして、天智天皇が「いかさまに　思ほしめせか」（どのように思われたものか）、その大和を捨てて近江の大津の宮を営まれたことを詠い、その宮跡が荒廃して「春草」におおわれ、春の日が霞んでいることを詠う。この長歌に、「志賀の唐崎」や「志賀の大わだ」は昔と変わらず大宮人を待ちかねているが、昔の人にはもう逢えないことを詠う反歌二首が添えられるという構成になっている。

また、高市古人（或書には高市黒人とある）の歌は、荒廃してしまった宮跡をみるのが悲しいことを詠い、その荒廃が「国つ御神の　うらさびて　荒れたる」（国の神の気がすさんで国が荒れてしまった）と詠う二首からなっている。ここで、万葉びとの発想として注目すべきは、「国」にはその国に鎮まる「御神」がいて、その神の「うら」（心の意）が荒れたので「京」が荒廃してしまったと詠う点であろう。持統天皇の御代にこうした歌が詠われることには、父・天智天皇の御代を振り返るといった「時」があったことを物語るのではなかろうか。

飛鳥浄御原の遺構が残る飛鳥京跡

高尾山の昆虫 110

アカガネサルハムシ

草食性の甲虫であるハムシの仲間は多種多様であり、美しい種も少なくありませんが、概ね十ミリ以下の種が多いため一般的に認知度が低く、愛好家もカミキリほどは多くありません。

そんな中でアカガネサルハムシの美しさは一際目を引くことでしょう。

サルハムシと言うユニークなネーミングは長い手足を持つサルを連想させることからと思われ、漢字に当てはめると「赤銅猿葉虫」ということになります。

本種は頭部・前胸・上翅の会合部と縁が金緑色、上翅の中央は赤銅色に光り輝く配色で虹色を思わせ、同系統な色彩を持つヤマトタマムシやニジイロクワガタを思わせます。

かなりの美麗種だと思いますが、大きさは七ミリ前後という小型種のため見過ごしてしまいがちで残念な気がします。

そしてハムシは全般的に植物の葉を派手に食い荒らすイメージから害虫と扱われて損をしている面があるのでしょう。

高尾では五月頃から見られますので、身近にいるメタリックな虹色の本種を見つけて癒やされるのもいいと思います。

（撮影・文　松島　孝）